

『知られざる祈り 中国の民族問題』

加々美 光行著



新評論 3600円

評者 ● 中嶋 嶺雄 (東京外国語大学教授)

世界史の新たな地平線を展望する意欲作

世界史の歯車が轟音を立てて動いている。だが、脱社会主義と脱冷戦という二つの基軸を中心にした同時代史の大きな潮流が行きつくところは、まだ定かではない。そうしたなかで、エスニシティーのせめぎ合いとして世界各地に噴出している民族問題は、既成の国民国家の解体や分裂、そして一方では再編や統合を促す基底的な要素となつて、いま新た

□著者□
かがみ みつゆき 愛知大学教授。一九四四年生まれ。東京大学文学部卒業。アジア経済研究所主任調査研究員を経て現職。主な著書に『逆説としての中国革命』『現代中国の黎明』など。

な注目を集めている。巨大な人口と多様な民族集団を擁する中国も、このような歴史の「深部の力」に抗することはできないのではないか。本書は、これまでほとんど解剖の

メスが加えられないまま、政治・イデオロギーや社会主義国家権力の既定方針の枠内に閉じ込められてきた中国の民族問題に、正面から立ち向かっている。しかも、安易な現状分析や漢民族優位という陳腐な現状肯定論、国家論や民族理論の骨格を欠いた少数民族への情緒的な親近感によるのではなく、現代史と国際関係の全体的な枠組みのなかに問題を位置づけ、少数民族の抵抗の秘められた歴史的息づかいを丹念にフォローしながら、世界史の新たな地平線を展望しようとした意欲的な労作である。著者の問題意識は、ロシア史とイスラム史の交錯する広域的時空を望もうとした山内昌之著『ラディカル・ヒストリー』(中公新書、一九九一年)と相関的だともいえようが、わが国の中堅の学究が、このような方向を着実に模索しつつあることは高く評価されるべきであろう。著者は、まず序章において、モンゴル、チベット、そしてトルコ系イスラム諸族の独立・自治の動きを中国内政との関連で解き明かそうとしており、民族主義とは、被支配民族の独立国家樹立への感情のみならず、「むしろ何よりも不当な国家権力によって自分たち民族集団が暴力的に抑圧支配されることを拒絶する感情をいうのである」と指摘して、本書の基調を提示している。このような認識は、解放された民族の政権であるべき社会主義国家権力がなぜ、今日の中国のように、域内少数民族

- ▷ 『知られざる祈り 中国の民族問題』
- ▷ 『資本主義のシステム間競争』
- ▷ 『21世紀型企業とネットワーク』
- ▷ 『クルポ〉高校って何だ』

□新刊の中から

- ▷ 『われらが生涯の最悪の年』
- ▷ 『ズッコケ牧師南アフリカに行く』
- ▷ 『この旅には終りはない』
- ▷ 『僕はランチにでかける』
- ▷ 『多様化する有機農産物の流通』

□筆刀直評(佐高 信)

『会社人間のボランティア奮戦記』

□海外REVIEW(川西 和夫)

『インドにおける子供と国家』



□編者□
 いまい けんいち スタンフォード大
 本センター研究所長。スタンフォード大
 学教授。一九三二年生まれ。一橋大学経
 済学部卒業。同大学院修了。一橋大学商
 学部教授を経て現職。著書に『現代産業
 組織』など。

崩壊したかの解明でもなければ、自由経済の望ましさについての再確認でもない。現実の経済がどう変化しその行き着く先はどんなシステムなのか。そして、そこに行くためには企業や国民は何を考え、何をすべきなのかなどに対する明快な解答である。ここで取り上げた今井賢一氏の二冊の近著は、まさにこの点を焦点に据え、新しい資本主義のあり方とそれに対する日本企業の戦略論を説いている。

資本主義に対する伝統的な理解は、「自由な競争」過程が効率的な資源配分を保証するというものだった。しかし今井氏自身が強調するように、現代の経済では競争よりも「調整」(Coordination)の果たす役割が大きい。単なるモノやサービスであれば、その選択は、あれが良いのかこれが良いのかという「代替」の関係であり、弱者が強者を淘汰するという競争プロセスが有効に機能する。しかし現代の経済システムでは、よ

り高い品質を確保するための高度な生産技術の開発やそのための情報交換が不可欠である。この場合、さまざまな技術や情報を持った個人や企業がお互いに協力・協調し、利害を調整することの方がより望ましい資源配分を作り出せる。この点は、今井氏自身も触れているように、産業レベルでの収穫逓増の役割に焦点をあてる最近の新経済成長論や新産業組織論が収穫逓増現象の背後のロジックとして強調するところでもある。

他方、現代日本の経済システムは、労使関係という企業内システムも、系列や銀行と企業間の企業間システムも、協調と調整を重視する。しかし、現代経済により適合した日本の経済システムも、二つの大きな問題をかかえている。第一に、協調や調整は一步まちがえれば共謀となり独占的な行動を生むだけでなく、ダイナミックな進歩を否定し後ろ向きで保守的な企業行動を生み出すことになりかねない。系列を典型とする日本のシステムの「不透明性」もまた、安易に協力や協調を賞賛することの落とし穴を示している。第二に、『21世紀型企業とネットワーク』が丹念に跡づけるように、すでに日本企業は国際的なネッ

トワークの展開を開始している。日本経済や日本企業がグローバル化を進めるためには、従来の日本的システムを超えた新しいシステムが求められることになる。

競争と協力のメリット

新しいシステムとして今井氏が提唱するのは、ネットワークを通じた調整によって、市場と組織を相互浸透させ、競争と協力のメリットをできるだけ生かそうとする方向である。具体的には、情報通信ネットワークによって需要者と生産者を結び付け、収穫逓増を通して市場を拡大

できる。場面情報から新しい文脈を読み取ることで組織をダイナミックに組み替えていく企業者を重視すべきである。さまざまなシステムを超えたネットワークを作り上げ、「個」と「全体」を結び付けるミクロ・マクロ・ループを方向付ける目標を持たねばならないなどの論点がそれである。経済学・経営学・技術論・ネットワーク理論など、今井氏の多彩な専門とその学問的蓄積を基に、現代の企業・経済と国家システムに斬新な視角から切り込んだ本書は、今後の企業や経済システムのあり方に関心を持つ人にとって必読の書物であることに間違いはない。

『ヘルボ』高校って何だ』

日垣 隆著



岩波書店
1200円

創造的なモラトリアムの場への道

高校は、(モラトリアム装置化)とへ大学進学専門装置化)とに二極分化してしまっただけで、どこに独自の存在意義を見出せるのか。高校は「誰のための、何のための」ものなのか。様々な高校教育の現場にお

評者 ● 井上 通泰 (都立高校教諭)

□著者□
 ひがき たかし フリーライター。一九五八年生まれ。東北大学法学部卒業。出版編集などを経てフリー。著書に『信州教育解体新書』など。

る調査・報道の試みをまとめた本書は、高校の現状に対して根源

の独立への希求を暴力的に抑圧しようとするのかを解くカギでもあろう。

第一章「幻の『諸民族の自決』」では、その初期には民族問題に関しても現実感覚を有していた中国共産党が、一九二三年の三大大会以降、なぜ「民族自決権」否定の方向に傾いたのかを、コミンテルンへの屈服過程として描いている。

第二章「文化大革命と新疆辺境」は、解放前、主として一九三〇年代の東トルキスタン民族運動を体系的に叙述したのちに、大躍進期、文化大革命期の民族政策の矛盾を浮き彫りしている。第三章「国際政治の変遷」は、主に内蒙古と新疆ウイグル自治区に焦点を当て、そこでの抵抗史を通じて問題の所在を探っている。第四章「民族・国家・階級」は、スターリンの「民族」テーゼを中国の民族的

な磁場において実態的にも理論的にも検証しようとしている。ここでは、内モンゴルと外モンゴルとの合併への要求が、ソ連に有利なヤルタ密約の履行を優先しようとしたスターリンの思惑に応じようとした当時のモンゴル人民共和国指導部の拒絶に合ったことを想定している点が特に興味深い。

本書は総じて、スターリンの政策や戦後の東西冷戦が中国の民族抑圧政策に影響した側面を大きな視野として取り入れており、中国内政と国際関係という座標軸を一貫して設定している点でも、注目すべきものがある。文革論や近代化論との関連では、一部に首肯できない論点もある

新たな可能性を開示

とはいえ、社会学のディシプリンを踏まえた著者自身の現代中国研究者としての新たな可能性をも全面的に開示している、と私は読み取った。

『資本主義のシステム間競争』

今井 賢一 著



筑摩書房 1800円

『21世紀型企業とネットワーク』

総合研究開発機構・今井 賢一編著



NTT出版 2600円

新しい資本主義のあり方を説く

評者●奥野(藤原)正寛(東京大学教授)

ソ連・東欧をはじめとした社会主義経済が崩壊し、資本主義諸国においても、日米摩擦による管理貿易の展開やECをはじめとした地域経済統合といったきわめてドラスティックな変化がおきつつある。これらの

進展は、計画経済や自由貿易という経済システムの伝統的な仕分けや理念が、現実経済によって追い越されてしまったことを如実に示している。いまや経済学や経営学に求められているのは、なぜ社会主義経済が

現代農業増刊号

10月上旬刊

「新農政」

「農基法」以来の新しい農政の枠組み「新農政」その意味の解明とボトムアップの政策具体化提

言集980円

いま水がおもしろい

8800円



話題の「小さい水」など水の最新科学から水ビジネス最前線、環境問題まで。

「地球」のために

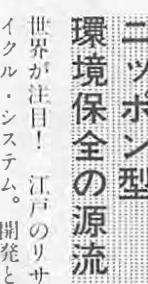
8800円



環境問題、多くの俗論を止し、保護と開発の二律背反を克服する方途を模索。

どうする日本農業

自由化、食費、農協、担い手：最重要課題をめぐって論敵同士が対決。9500円



環境保全の源流 ニッポン型 世界が注目！ 江戸のリサイクル・システム。開発と修復の見事な関係9000円

<価格は税込>

農文協 03(3585)1141 FAX03(3589)1387 〒107 東京都港区赤坂7-6-1